

浪江の

こころ通信

・第8号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第8号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261





◀トロフィーを受け取るチーム代表

原発事故によって避難を余儀なくされているけれど、今住んでいる地域でアンテナを高くして前向きに暮らしています。

■「こつこつという支援もあるのだと気づかされました。」と、小松山司キャプテン
二本松の体育館と真摯様、そして今の仮設住宅では、多くの方々から義援金や生活支援物資をたくさんいただき、本当にありがとうございます。ただと思っています。
しかし高島町の支援は少し違いました。大吉の伊藤さんや高島町ソフトボール協会会長の高橋英助さんをはじめ多くの人たちが、私たちに集まれる場所と時間を提供することで応援をいただきました。他の地域のチームを町の大会に参加させるなど、なかなかできないことです。山形新聞も地元ケーブルテレビ局も大きな話題として取り上げてくださいました。



『浪江大吉SSB』のメンバーたち

後列右から
伊藤健彦さん(やきとり大吉)、松崎智恵さん(マネージャー)、木幡健一さん、熊谷 徹さん、島田有紀さん、本田隼也さん、小荒井雅治さん
前列右から
平田邦之さん、柘谷拓郎さん、山崎 徹さん、松崎光平さん、小松山 司さん

『浪江大吉SSB』メンバーからのコメント

(選手は五十音順、カッコ内は現在の居住地)

- 熊谷 徹さん(福島県相馬市) 一日一日を大切に歩いていきましょう!がんばっぺ浪江町!!
- 小荒井雅治さん(福島県郡山市) ソフトと避難生活、どちらもホームに帰ることが大事だ。座布団一枚!
- 小松山 司さん(福島県二本松市) まほろばの スウィングガールズ巡らせて 高島ワイン 母を誘ふ
- 木幡 健一さん(福島県南相馬市) あの苦しいときに出会えた高島の人たちの温もりと、仲間との絆を胸にこれからも頑張っていきたいです。
- 島田 有紀さん(福島県二本松市) SSBは、こういうときこそみんなの絆で優勝を目指し新たな未来を作っていきたいです

- 平田 邦之さん(群馬県館林市) 高島町の皆さま、お世話になりました。頑張っぺSSB 頑張っぺ浪江町 やっっちゃうべ×2
- 本田 隼也さん(福島県南相馬市) 浪江SSBの絆は一生の宝物です!
- 柘谷 拓郎さん(福島県南相馬市) 高島最高!SSB最高!! メンバー100人目指して頑張ります。そして株式会社SSB設立!
- 松崎 光平さん(宮城県仙台市) 喜びも悲しみも明日への力に変えて。俺は貴方の分まで笑って生きる!
- 松崎 智恵さん(マネージャー)(宮城県仙台市) みんなと久々に会えて安心しました。
- 山崎 徹さん(宮城県仙台市) SSBは絆の強いチーム。その仲間の一員にいることは誇りです。



ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」 松崎 光平さん(権現堂)・小松山 司さん(田尻)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山 取材日：1月8日
NPO法人ビーンズふくしま 中鉢

「ありがとう高島」^{たかはた} 僕たちは、前を向いて進む

松崎さんの避難先だった山形県東置賜郡高島町で行われた昨年秋の第47回総合体育祭・ソフトボール大会に浪江町チームとして出場し、見事、準優勝。散り散りとなって避難生活を送る浪江の仲間たちとともに、再びスポーツができた幸せを噛みしめると同時に、「仲間との再会と高島町との交流の場、時間を与えてくださった町に、心からお礼が言いたい。」と開口一番、話してくださいました。そして、「チームとして記事になったこの『浪江のこころ通信』を、お世話になった高島町のみさんに届けに行きたい。」とのことでした。



▲チームを代表してお話ししてくださった松崎さん(右)、小松山さん(左)

■まず、代表である松崎光平さんにお聞きしました
チーム名である『浪江大吉SSB』は、高島町の大会に出場するために結成した合同チームの名前ですが、「大吉」には訳があります。昨年10月2日に行われた体育祭に出場するきっかけを作ってくれたのが「やきとり大吉」のご主人、伊藤健彦さんなのです。
各避難所を転々とし、たどり着いた高島町武道館で途方に暮れていたところ、明かりが灯る店があり、温かい食事とお酒をいただいたことが親しくなるきっかけでした。町の体育祭に出場させていただけるとは思いもよりませんでした。「何とかしますから!」の声に励まされ、東京・群馬・福島・宮城など各地で暮らす仲間たちに連絡を取り、11人の仲間が集まりました。実はこの避難中、チームの仲間の1人を亡くし、悲しみのどん底にいたメンバー

に、希望の光を与えてくれた出来事となり「今しかない!」という思いが余計に強かったと思います。
浪江町で町の大会に毎年出場していたSSBと、小松山さんの「パイ山社中」との合同チームを結成し、試合に出場することになったものの、球技用具もなく、練習もゼロでした。それでも大会当日は和気あいあい、珍プレー好プレー満載の楽しいひとときを過ごせました。
私達には「大きな野望」があります。各地に避難している仲間たちの地域でソフトボール大会に参加させていただくことです。そのため仲間には「この現状を理解し、今ある生活を最大限生き抜こう。」と言っています。さまざまな場所での暮らしがあると思いますが、楽しいことを一つでも探して、前へ進むことができます。僕たちには必要だと思っています。



◀山形県置賜郡高島町第47回総合体育祭・ソフトボール大会の賞状をチームに授与する協会会長 高橋英助さん



井戸川洋子さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井・竹内
取材日：1月15日

子どもが独り立ちしたらふるさと浪江に 必ず戻りたい 一県外避難者の生活への理解を

井戸川さんは、埼玉の借り上げ住宅に家族5人で暮らしています。震災後は、川俣や郡山、そして会津の総合体育館では2週間以上、1歳の莓香ちゃんを抱えたまま避難所生活をし、昨年の3月末から人間市に移りました。現在は、市内で2カ所目となる小さなアパートで支え合って生活を送っています。

3月末に埼玉に来て以来、別のところに移ることも考えましたが、小学4年生になる長男がこちらの学校に慣れたことを考え、ここでしばらく生活しようと話しています。

震災後は、夫も私も就職活動をして仕事を得られず、生活を支えていた失業手当も、もう少しで切れてしまいました。特に小さな子どもを3人抱えているので、なかなか思ったような仕事にはつきません。周囲には知り合いもいません。私も保育所などでお友だちを作りたいと思いますが、親御さんの間で原発のことが話題になると、心が引けてつらい気持ちになります。

浪江にいたころは、子どもの運動会や誕生日などでも親戚がみんな集まり、楽しく盛り上がっていました。今ではまったくその面影はありません。私が浪江で頑張っていたママさんバレーのチームの皆さんにも、そして夫が趣味のクライミングで楽しくしていた仲間の皆さんとも、しばらくお会いしていません。話し相手がないことが本当に寂

しいですね。

以前は権現堂で杉乃家というそば屋をしていました。たくさんの方々の協力があって、現在は父と母で二本松市で再開しています。再開する際、私たちに手伝ってくれないかと父に言われました。手伝いたい気持ちと子どもたちのことでも悩みましたが、帰らないことにしました。本当に辛い決断でした。

先日父から、しばらく二本松で頑張るという話を聞き、私たちもここ埼玉で新たな暮らしを築かなければと思っています。ただ、この春に警戒区域の見直しがあると聞いています。そうした場合が見えてこない、これからの生活設計も描けずいます。

原発事故の影響で小さい子どもを抱えた家族は、県外に避難せざるを得ないのですが、福島と関東では経済状況が違うので、借り上げ住宅などについても同じ補償基準では生活がかなり厳しいです。生活の場は違いますが、私たちは今でも浪江町民だと思っています。ぜひこうした県外避難者の生活実態にも目を



▲左から夫の周作さん、莓香ちゃん(1歳)、洋子さん、正輝君(5歳)、慎君(10歳)

向けていただきたいと思います。

夫も私も浪江で生まれ、浪江で育ちました。私たちにとっては、たった一つのふるさとです。今は子どもが最優先ですが、将来、子どもが独り立ちしたら必ず浪江に戻りたい。強く思っています。



堀 喜久子さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井・竹内
取材日：1月15日

浪江・請戸のきれいな星空、 そして隣近所とのつながりがなつかしい

堀さんは、震災後、親戚を頼って大熊、船引、本宮、そして埼玉県蕨市などを転々とし、昨年3月末から狭山市の借り上げ住宅で、夫の浩喜さんと娘の真理子さんと3人暮らし。請戸で一緒に暮らしていた8人の家族は離ればなれとなっています。



▲真理子さん(左)と喜久子さん

浪江では権現堂で「源喜」という居酒屋をやっていました。夫が8年前に開いたお店で、息子や娘たちに支えてもらいながら、家族で力を合わせ頑張っていたところでした。請戸の自宅は津波で流され、お店も食器などが散乱したままです。私自身は、震災後、一時帰宅も含め、一度も浪江には戻っていません。変わり果てたまちを見ることで、逆につらくなるのではないかと、も思っています。今は、こ

れから先のことも考えられず、います。ふり返ってみると、これまで家族でもほとんど話し合っではきませんでした。板前としてお店を頑張ってきた夫のことを思うと、これからの話に踏み込むことにも心が痛みます。できれば、以前のように家族みんなが同じ屋根の下で暮らせる日が来てほしいです。

こちらでは、地域の民生委員さんや近所のお店の方からよく声をかけていただきます。また、狭山市では月に1回、このまちに住む被災者を集めた「まごころ昼食会」を開催してくれます。毎回80名の方が集まりますが、唯一、話ができる場所です。ですが、それ以外は福島の方とも、まして浪江町の方々と話す機会はなく、もともと話ができる場が欲しいですね。

震災後、娘は町民の皆さんと津島に3月15日まで避難していました。報道にもあるように線量が高い所にしばらくいたことが気がかりです。ホールボディカウンター検査は、福島ではなく、もっと身近なところでき

ないものでしょうか。できるだけ早く受けさせたいです。借り上げ住宅の期間が延長になるのかどうかも気がかりです。

いま住んでいるところは周囲に畑などがあるので、浪江を思い出して少し安心できます。浪江では、仕事が終わると必ず見上げていたきれいな星空に、いつもホッとしていたことがなつかしいです。人情に厚く、温暖な気候で自然も食べ物も豊かな浪江の暮らしがどんなに大切なものだったかを思い出します。

そして、あらためて浪江では周囲の方々に支えられて生きてきたことを実感します。隣近所の皆さんに心からお会いしたい。それまで家族で支え合って頑張っ



栃木県

清水 昭子さん(酒田)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 徳山
取材日：1月15日

震災前の仲間たちと元のように暮らしたい

浪江町酒田から両親の出身地の栃木県に避難した清水さん。昨年末に同県那須塩原市に7回目の転居を経て、父親のライフワークともいえる趣味の家庭農園ができる家が見つかり、やっと腰を落ち着けて生活できる場所にたどり着きました。

震災時と避難については、地震発生時建物の被害はほとんどありませんでしたが、防災無線で原子力発電所の事故による避難指示が出ました。そのときはすぐ帰れると思って、着の身着のまま避難しました。避難地域が拡大したことで最初に避難した場所もまた避難しなくてはならない状況になり、両親の出身地でもあり親類もいる栃木県に避難場所を決めて避難生活することに決めました。栃木県に避難してしばらく大田原市に身を寄せていましたが、昨年12月に父の趣味である家庭農園ができる住宅が見つかりそこへ移り住むことができました。避難先では地元の人たちの温かい支援を受けることができたので本当に感謝しています。

私たちが住んでいたのは、酒田川原というところで海が見えるところでありませんが、近くに鮭が遡上する川があり、山並みの風景があり、白鳥が飛来してくる湖など自然が豊かな場所です。しかも生活するうえでもとても便利な場所でした。それに比べると今住んでいる場所は少々不便な場所に感じてしまいます。困っていることは、自由に自宅に帰ることができないので、今の家の状態が良くわからないし、庭の植木のことなどどうなっているのか心配です。福島県民だと栃木県で暮らすにはちょっとしたことでも不便に感じるものがあつたりします。積極的に情報を得ようとする、パソコンが必要になります。今現在なんとか仕事に就くことができて、家族が落ち着いて暮らせる場所を見つけたことができました。



▲父正一さんの開墾中の家庭農園をバックに3人で



栃木県

山田 義行さん(牛渡)

取材者：とちぎボランティアネットワーク 徳山
取材日：1月16日

「一陽来復」を心の支えに

浪江町牛渡から那須塩原市に避難生活を送っている山田義行さん。

震災前に同居していた息子さん夫婦とは仕事の関係で離れ、奥さんと2人暮らしを送っています。



▲お孫さんの写真をバックに夫婦で撮影

3月11日の震災の翌日、朝食を食べていたら防災無線から避難指示の放送が流れました。すぐに帰れると思って位牌だけ持っただけで着替えも持たずに避難しました。最初の避難先で事の深刻を感じ東京方面に避難しようとしたが、途中で親戚な埜町の人たちと出会い3月末までその公民館に避難しました。4月から親類のいる静岡県で9月ま

で避難生活を送りました。いずれの避難先においても地元の人たちから至れり尽くせりの待遇で、お世話になった皆さんに対して非常に感謝しております。最終的には浪江町に近く、車などで帰るのに都合の良い栃木県的那須塩原市で10月から避難生活を送ることにしました。今住んでいるところは団地のような土地なので、私が以前住んでいたところより近所づきあいが少ないので積極的に外出しているいろいろな人に声をかけて、この土地の人たちと関係を築こうと行動しています。

私たちの住んでいた地域はもとも漁業と農業しか産業と呼べるものがなく、若いころ農閑期は出稼ぎなどをしていました。原子力発電所を一般企業の工場と同じように誘致することで、仕事場が増え地元が潤うと思っていましたが、今回の震災の結果を見ると私がいかに原子力発電所や放射能というものに対して無知であつたかを痛感してい

ます。若いころから人生の計画を立てて震災前までは何とか順調に達成することができていました。それが70歳を過ぎて今まで築き上げたものの多くを無くしてしまつたことについては、非常に残念でならないです。いつの日か帰れる日が来れば震災前の生活のリズムを取り戻したいです。そして、軌道に乗っていたプチトマトを育て、賃貸物件のアパートを修復し住んでもらいたいです。そして息子夫婦の家族とともに6人の家族で生活を取り戻したい。そのためには若い人たちが安心して暮らせるまちづくりを実現しなければなりません。

今年いただいた年賀状に「一陽来復」という字を書いたものがありました。悪いことがあつた後に幸運が来るという意味で良い言葉だと思いました。この言葉を胸に抱いて浪江町へ帰る日を夢見て生きていきたいです。



福島県

澤田 裕美さん(川添)

取材者：NPO法人ピースふくしま 佐藤
取材日：1月13日

希望の光をみつけるまで

川添に住んでいた澤田さん。現在、福島県郡山市熱海町の借り上げ住宅で、裕美さんの母、裕美さんご夫婦、2人の娘さん、愛犬とともに暮らしています。数力所の避難場所を経て、熱海町で日常の落ち着きを取りもどしつつあります。

87歳の祖父、5カ月の子どもを含め、私たち家族、いとこ家族、叔父、叔母で津島小学校、親戚宅、体育館、アパートを14人で時には離れ離れになりながら、転々としてきました。そんな中、室内犬を連れてきた母は、犬と一緒に車に寝泊りし、寒さをしのぐため体中にカイロを貼り、犬を抱きかかえて過ごしていました。犬の体重は7kgも減り、私たち同様、動物にもストレスがかかっているのだと感じています。避難生活から10カ月、ようやく1kg戻ってきたんですよ。印象深かったのは、福島市に避難していたとき、見ず知らずのご高齢の女性が声をかけてくれて、大きい紙袋に衣類などの生活用品を入れて私にくださったのです。袋の下には「年金暮らしのしがないお金ですが」というメモとともに1万円が入っていました。避難してる間、たくさんの方に優しい言葉をかけていただきました。名前も知らない方々ですが、本当に感謝しています。

先の見えない不安がつらいですね。「どうせ移動しなくちゃならない。」という感覚があるんです。今後の生活が定まらないうと、生涯の計画をたてられません。子どもが「保育園のみんなに会いたい。」と言うんですが、なかなか会わせられないのもつらいです。最初は震災の不安で気の許せる人に会って話すと涙が出てしまつて。でも涙を見せると子どもが不安がってしまうから見せないようにしていました。夜中にハッと目を覚まして「何でここにいるんだろう。」と思ったり、暮らしの目標がなかなか見えてこず、つらい時期もありました。けれど、あるときからふつ切れました。悩んでも泣いてても状況は一緒。笑顔でいられるなら、そのほうがうまくいく。笑顔で前を向こう。今できることをしよう。そう思えるようになって。



▲りりなちゃん(左)と裕美さん

私たちはとても不安でしたが、あつという間に幼稚園で友だちができました。大人が思っているよりも子どもはたくましく、安心しました。避難しての方で目標がもてない時期というのはつらいと思うのですが、自分の中に希望の光がみつけれれば楽になるんじゃないかなと思います。



宮城県

泉田 沙織さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：1月15日

子どもたちが戻れる浪江町になって欲しいと願っています

震災後、新潟県の妙高高原の国立青少年自然の家に避難。その後、6月末に仙台市青葉区中山に移りました。現在は、子ども2人と3人暮らし。夫と義母は福島市在住のため別居生活を送っています。



▲右から、沙織さん、百合香ちゃん、圭一くん、征慶さん
仙台市内のアパートにて

仙台での暮らしは、近くにスーパーや医院、郵便局などがあり便利ですが、家が密集しているので窮屈さを感じます。また、浪江では季節に1〜2回しか降らなかった雪も、仙台では降る日も多く、積雪は多くないので道路や階段が凍るのでひやひやしながら歩いています。子どもたちには、底にスパイクがついている靴を準備したところですね。

はじめのころは、仙台で子育て情報を収集するのに苦労しました。幼稚園の送り迎えで知り合った近所のママ友に聞いたり、自分から病院など各所に問い合わせしたり、同じ幼稚園が縁で浪江町から避難してきている方と知り合つて聞いたり。浪江町役場からのメール情報も助かっています。住民票を仙台市に移していない避難者に対しても、避難先の自治体から暮らしの情報も得られると大変助かるのですが・・・。今後は、子どもたちが戻れる浪江町になって欲しいなと願っています。

■圭一くん
浪江小学校では3年2組でした。学校が終わると友だちと鬼ごっこやケードロ(警察と泥棒)をしたり、ゲームをしたり、プラモデルを作ったり、自転車であちこち走りまわつて遊ぶのが好きでした。今住んでいるところは坂や家、車が多いので自転車には乗っていません。あとサンプラザに行つておばあちゃんが買物をしてる間にゲームセンターで遊ぶのも好きでした。

ぼくは、おばあちゃんが大好きなので、今は離れて暮らしているのがさみしいです。早く浪江のお家に帰つて、友だちと一緒に遊びまわりたいです。

■征慶さん
私は今、平日は福島市で母と住んでいます。週末になると仙台の妻と子どもたちの元に出向いています。浪江では建設会社を経営していました。現在は、会社事務所を南相馬市原町区に移し営業しています。常磐自動車道が早く開通してもらえれば、暮らしと仕事をもっと工夫できるのではないかと願っています。

震災後は仕事で行方不明者の捜索や仮設住宅の建設にも携わりました。今後は浪江の復興、基盤整備に関わられたらうれしいです。

今思うのは、早く浪江の街で飲み会、乾杯がしたい！ということ。つまみはもちろん浪江の美味しい魚介類。離れてみて浪江の良さをいくつも実感しています。



大島 信司さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 佐藤
取材日：1月14日

「町のしっかりとした方向性をきちんと決める」 …難しいことはわかってるけど、 やっぱり今一番考えたいことです

JR浪江駅前で美容室「ビューティサロンちどり」と「ヘアデザイン クリエーション」を運営していた大島さんは、原発事故後転々とした後、福島市内の借り上げ住宅に落ち着き、昨年11月3日に美容組合4店舗共同で「なみえ美容」を二本松市と福島市の仮設住宅内にオープンさせ、1月8日の成人式には浪江の新成人の「一生の思い出」を心熱く支えました。

■浪江の新成人は浪江の美容師が支えたい
昨年11月3日に、美容組合4店舗(美容室ローズ、ビューティーサロン中里、ふたば美容室、ビューティサロンちどり)共同で、安達運動場仮設住宅(二本松市)と北幹線第一仮設住宅(福島市)内に、「なみえ美容」をオープンさせ、交代で運営しています。原発事故後転々とした後、何もしない生活には耐えられませんでした。仕事をして、生活にメリハリをつけたいと思いました。何よりお客さんのその後が気になって、リサーチのためにも、早く再開したいと思いました。昨年の5月ごろから、町役場と仮設住宅内で美容室を再開したいと交渉をはじめ、やっとオープンすることができました。成人式に間に合っただけでよかったです。「浪江の新成人の『一生の思い出』は、やっぱり浪江の美容師が支えなきゃ。」と思いましたが、十分な環境とは言えませんが、新成人やその家族の皆さんの皆さんの笑顔を見ることができました。「若い人たちの明るさは町の活気だ。」

■「町のしっかりとした方向性をきちんと決める」
難しいことはわかっています。震災前は、まちづくり会社、東遊記の専務をするなど、商工会の場などでまちづくりに関わっていました。不安な思いを抱え



▲「なみえ美容」二本松店(二本松市安達運動場仮設住宅内)で、妻昭子さんと
(TEL090-8924-1801)

■お客さまの喜びは私の喜び
お客さまが「きれいになった!」と喜んでくださる、そのヘアスタイルのお顔に笑みがこぼれた瞬間が、私の喜びです。お客さまがきれいな髪になって、重くなったり口から少しも思いの端が言葉にならなくなると、そんな場に「なみえ美容」がなれたらと思っています。(取材者：ゆつたりとしたソファの傍らに、お茶やお菓子があまりました。)

とつくづく思いました。



森岡 哲郎さん(大堀)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：1月12日

今年暮れまでは、私も桑折町自治会も 正念場になりそうです

大堀地区の役員をしていた森岡さんは、地震・津波災害発生当初から地区住民のお世話をされたそうです。原発事故による避難のため、一時福島を離れ、埼玉県狭山市に移住しましたが、現在は伊達郡桑折町の仮設住宅に、家族3人で暮らしています。



▲防犯協力の委嘱を受けた際、福島県福島北警察署長さんらとの記念写真をお持ちになって

私は、井手にある宿泊施設を備えた農業や里山暮らし体験事業を行う会社に勤務し、3月11日は東京から20名の体験者を受け入れてじゃがいも畑作りを行いました。体験の方々は施設で一泊を明かし、翌12日朝に急ぎよバスで東京に戻っていたのですが、なんと到着は13日になったそうです。
一方、私は役員をしている約120戸の地区住民に老人福祉施設「やすらぎ荘」へ避難してもらい、炊き出しを行ったり、

持ち寄った発電機でテレビや温風ヒーターを動かしました。12日夕方には避難指示が20km圏内に広がり、私たち家族8人は津島に向かいましたが、避難所は満杯だったため、結局、郡山の義姉の家にお世話になりました。その後、埼玉に移り、会社を通じて狭山市の民間マンションに入居しましたが、その間に借上げ住宅申請の手続きを行い、母と私たち夫婦の3人家族と、息子たち5人家族の2軒を借りました。

境整備の調査や提案、回覧など連絡体制づくりや支援団体さんのマッチングなど、毎週行う役員会の議題がどんどんハードからソフトへ変わってきています。また、9月からは福島北警察署から委嘱を受け、防犯協力者として10名の仲間とともにパトロールも行っています。
自治会設立から約半年になりますが、大きな成果としては、東京電力から住民への直接説明会や原子力賠償請求支援機構による訪問説明会の開催、年末年始の防犯活動などでしょう。反面、課題としては、住民の大多数を占める高齢者の引きこもりへの対策、集会所を活用したさまざまな活動の参加者を固定化させない工夫などが挙げられるでしょう。

伊達郡桑折町に移ったのは6月下旬です。浪江町役場がある二本松を希望していましたが、桑折は比較的早く完成した割には入居率が低く、申し込みやすそうだと決めました。住んでみると、浪江にも比較的近く、山や自然に恵まれており、よかったです。と思っています。
桑折の仮設住宅では、約400人の自治会の副会長を務めています。設立準備会から関わり、最初は名簿作りや支援物資の取り扱いなど毎日のように活動しましたが、8月に自治会が発足してからは、季節ごとの住宅環

さらに、この春先には避難地区の新たな線引きも決まり、皆さんの身の振り方も大きな問題となります。町や自分たちの土地への思いに寄り添いながら、除染や復興恒久住宅の確保など、人間らしい生活を取り戻すための支援を進めなければと思っています。